

令和6年度 第2回千葉県博物館協議会 議事録

日時：令和7年1月24日（金） 午前10時00分～12時00分

会場：千葉県立中央博物館 会議室

出席者： 委員 齋藤委員、布施委員、高橋委員（暫定議長）、細谷委員、綱島委員

博物館 美術館：貝塚館長、高山普及課長

中央博物館：稲村館長、田中副館長、小田島副館長

現代産業科学館：尾崎館長

関宿城博物館：糸原館長

房総のむら：岩崎館長、鎌形副館長兼事業課長

文化振興課 立和名副技監兼学芸振興室長、村田副主幹、宮川副主査

事務局 伊左治企画調整課長、石渡上席研究員、園部研究員

※ 配付資料確認【事務局】

- 1) 議事次第
- 2) 協議会委員名簿、出席者名簿、座席表
- 3) 議事資料 <資料1> 県立美術館・博物館5館の連携の現状と課題
<資料2> 県立美術館・博物館5館の連携の新たな取り組み案
<参考1> 千葉学講座一覧
<参考2> 令和6年度千葉学講座チラシ

- 1 開会【事務局】：傍聴者なし
- 2 あいさつ【中央博物館：稲村館長】
- 3 出席委員自己紹介
- 3 出席職員自己紹介
- 4 会長及び副会長選出
- 4 議事（別紙参照）
- 5 諸連絡【事務局】
- 6 閉会【事務局】

(別紙)

【議事】

<千葉県博物館協議会会長・副会長の選任>

【事務局】

今回は、委員の改選後、最初の会議となります。博物館協議会運営規則第2条に「会長および副会長は、委員の互選によって定める。」とされております。委員のみなさまの中から会長及び副会長を選出いただきますようお願いいたします。

【高橋委員】

見渡したところ、私が一番年長のもので、経験が一番長いような気がしますので、僭越ではございますが私が会長をさせていただきたいと思いますが、どうでしょうか。

【出席委員】

賛成（拍手）

【高橋委員】

では、副会長はもうけっこう長く委員をやっていらっしゃる関沢先生にお願いするのがいいのではないかと考えているのですがいかがでしょうか。歴博の副館長などもなさっていたので、適任だと思います。

【事務局】

どうもありがとうございました。ただいま、会長に高橋委員、副会長に関沢委員の推薦がありました。みなさまどうぞよろしくようお願いいたします。関沢委員に関しましては、本日欠席されておりますので、後日事務局を通じて了承をいただくことといたします。

それでは、博物館協議会運営規則第3条の規定により、「会長が会議の議長となる」こととなっておりますので、高橋会長に議事進行をお願いいたします。

【高橋議長】

はじめに、ひと言だけご挨拶させていただきます。私は専門が化学で、こういった協議会の場に出てきたものですから、当初は右も左もよくわかっていなかったのですけれども、少しわかってきたというところで、会長という立場に立たせていただくことになりました。博物館法第23条第2項の規定として「博物館協議会は、博物館の運営に関し館長の諮問に応ずるとともに、館長に対して意見を述べる」というような定義になっており、この委員会の役割として、県の博物館に関して運営やそれぞれの館の事業に対して意見を言えるという、

すこし大げさになると思いますが、色々と質問をしたり、考えていることをユーザーの立場や専門家の立場として申し上げるのがこの場と考えておりますので、どうぞ活発なご意見をお願いしたいと思います。私も素人の質問をいたします。素人の質問で全然かまわないと思っておりますので、できるだけ活発な会議となりますようご協力をお願いしたいと思います。本日の議事は1件、「千葉県立美術館・博物館5館の連携と新たな取り組みについて」です。これについて、事務局より説明をお願いいたします。

<千葉県立美術館・博物館5館の連携と新たな取り組みについて>

【事務局】

(以下、配布資料で詳しく説明)

●県立館の連携の必要性

まずは、「県立美術館・博物館5館の連携の現状と課題」をご覧ください。なぜ、県立美術館・博物館の連携が必要かといえば、博物館法の改正により地域連携が努力義務の一つとされ、また県立美術館活性化基本構想や中央博物館みらい計画にその取り組みが明記され、実施計画で地域や他館との連携がより具体的なビジョンとして設定され、県立博物館の重要課題となっています。また、質の高い文化振興・地域振興に貢献するためにも、県立博物館同士が今まで以上に連携を深めることが重要かと思われます。各館の活性化につながる連携の形を模索するためにもさまざまなご意見をいただければと思います。

●現状と課題

現在、県立5館が連携して行っている事業は、年1回行われている千葉学講座のみであり、共同コンテンツが少ないことが一つ目の課題です。昨年度からは日にちを2日間に分けて開催しています。二つ目の課題として、各館で職員の入れ替わりがあり、若手の職員が増えたことや、専門性・職員構成から、他館との職員交流の機会が少なく、あまり他館のことを知らない、職員間の関係が希薄であることです。三つ目として、各館の情報は原則各館で発信しており、県立5館の総合的な情報発信媒体は、「千葉の県立博物館」のホームページのトップページのみで、総合的な広報力が低く、広報対象が固定化・極小化していることです。

●目指すべき連携とは

現状と課題を受け、この先模索していく5館の連携とはどういうものかとして、三つ挙げました。一つ目は各館の個性と強みを生かし、各館がお互いに魅力を引き出す相互扶助関係を築くこと。二つ目として、職員レベルでのネットワークを形成し、活発な情報交換により経験と知識を継承すること。三つ目として、共同して情報発信を行い、各館の情報や千葉県の魅力をより効果的に発信することです。

●連携の新たな取り組み案

これらを「職員の情報共有・交換と人材の育成」、「広報力・情報発信の強化」「新たな共同事業や共同コンテンツの創出」という視点から、各館の課長が集まり「新たな取り組みとしてこのようなものがかんがえられるのではないか」というものを協議し、案を出し合い、4つにまとめました。複合的に期待できるものもありますが、先の3つの視点のどれに当たるものかは、色分けして示しております。

一つ目「①県立博物館の人的交流・情報交換の場の創出」として、例えば県立美術館・博物館交流会（仮称）として、年間2，3回程度の情報交換の場を設ける。ワークショップ等のそれぞれの館の現状と課題の意見交換であったり、展示準備などの技術的な共同作業、合理的配慮を必要とする来館者の事例報告会など、他館の見学と施設や課題の共有を行い、それぞれの博物館を知る機会を創出するものです。

二つ目「②ワークショップ及び展示の出張実施」は、他館へ出張し、ワークショップを行ったり、資料を紹介する出張展示を行うもの。各館の特性を活かし、地理的に広く県民へのサービスを充実させるとともに、当該館の本来の来館者層とは異なる層の誘致を図るものです。

三つ目「③SNSを使った広報での連携」は、各館で運用しているSNSを連携し、他館の利用者層や実際には来館しない層にも情報を波及させ、知名度の底上げを狙うもので、協力して県立5館の情報を発信する体制を築くための提案です。

最後四つ目は「④デジタルサイネージを用いた県立博物館情報コーナー」は、各館に自館だけでなく他館の内容も含めて県立博物館の概要や活動内容などを紹介する専用デジタルサイネージを設置し、ウェブサイト閲覧する機会の少ない情報弱者の来館者に対し、操作が簡単で視覚効果の高い情報サービスを提供するものです。また、各館の共同コンテンツを作るための媒体としても活用でき、将来的には県立美術館・博物館にとどまらず、県内博物館や地域の情報なども発信する他機関や地域との連携ツールとしても発展的に活用できる可能性も有するものです。

以上、実現のためにはさらなる協議が必要ですし、今後予算措置が必要なものがございますが、取り組み案として挙げさせていただきました。

委員の先生方には、現在行っている「千葉学講座」と「新たな取り組み」というものに焦点を当て、色々ご意見いただければと思います。また、考える上で、どうしても博物館内側からの発想となってしまう部分もあるかもしれません。委員の先生方のもっと広い視野から、「このようなこともできるのではないか」というご提案などありましたら、ぜひ伺いたいと思いますので、よろしく願いいたします。

【高橋議長】

これまでの千葉学講座と、これからの試案を分けて考えていこうと思います。まずは千葉学講座について、何かご質問等あればお願いします。

千葉学講座は、最近では2日に分けて実施するようになったとありましたが、何か理由があるのですか。

【事務局】

1日で4講座、5講座を行うとなると、朝から長時間となり、参加もなかなかしづらい部分もあります。そこで2日間に分けて、各日2テーマずつ設け、より参加しやすい形としたということです。

【文化振興課】

補足させていただきますと、千葉学講座は20年近く前から始まっているものですが、本来立ち上げ当初は、半期や、数か月に分かれていて、定例で千葉の講座を博物館に来れば受講できる形で組んでいました。それが県の予算などの諸事情もあって、開催形態が変化していき、ここ5、6年はコロナ禍もあり、中止や1日に集約して行っておりましたが、県の方からも、そういう機会を増やしてほしいということで予算措置も行い、ようやく2日間となっておりますが、今後は少しずつでもこうした学芸員が県民に自分の研究活動などをしっかり伝える機会を増やしていきたいと思います。

【細矢委員】

千葉学講座、とても面白いテーマだと思いました。科博ですと、大学生のための自然史講座というのを、大学生とかが来られるように毎週金曜日の夜に行っています。例えば7回連続で毎週金曜日に、テーマを入れ代わり立ち代わりいろいろな研究員が場所は1か所で行っています。千葉というものをもっと知ろうと、様々な側面から行うことからすると、内容的には非常に幅広い人たちが話をしているので、とても良いのではないかと思います。場所が中央博物館にほぼ限定されているのは、ホールなど会場の物理的な制約による問題なのでしょうか。

【文化振興課】

以前は持ち回りで、美術館ですとか、現代産業科学館なども使っておりました。

【細矢委員】

ということは、そのように各館をまたぐ形で、いくつかの行事を、千葉学講座と看板を入れることによって横繋ぎにすることも可能ということですね。そのようなやり方もあると思いました。新しいことをやれば、必ずお客さんも増えます。ですが行うことで、実施する方はどんどん消耗していきます。体力もそうですし、資金が、とにかく先立つものが必要とな

りますが、先ほど予算が増えたというお話だったので、今度は職員の負担をどのように減らすかということになるかと思います。その負担を最低限に抑えながら、千葉学講座としては広げていくような印象を与えるという形が良く、すでにあるものをこの千葉学講座の中に入れていくことによって、コンテンツは広げられるのでは。なので、場所についても、そのような場所をいくつかを増やすことによって、より幅の広い形のコンテンツに変えられるのではないかと思います。

【高橋議長】

千葉学の講座のテーマは研究員に任されているのでしょうか。企画として、あるテーマで講師が何かお話しするというよりは、研究員個人の成果を県民に開示・還元するようなものなのではないでしょうか。

【文化振興課】

直近数年の千葉学講座をみますと、これまで行った展示の紹介ですとか、その展示の際に調査したことなどの発表になっていますが、以前はこれに付随して、合同企画事業として幹事を回したりして、大きなテーマを1つ設け、例えば「船」というテーマであれば、美術館は船をテーマにした絵画についての話しであったり、科学館では船の機械的・能力的な話をしたりと1つのテーマに沿う形で、それに関連した内容で行っていた時期もあります。ただ現在、研究員は専門分野での研究を様々しているので、専門研究の発表の場としても活用されていると認識しております。

【高橋議長】

個人的な感想を申し上げますと、展示の時期と合わせて開催されるとより良いのかなと思いました。千葉学講座で話を聞いて面白いと思っても、展示がすでに終わってしまっているのは、なにかもったいない気がします。時期的に2月3月の開催が多いようですが、何か理由があるのでしょうか。

【文化振興課】

その時期は閑散期ということもあります。以前は秋や特別展・企画展を行っているなかでの開催もありましたので、先生方からのご意見のように、やはりせっかく千葉学講座に来ていただけるのでしたら、その講座だけでなく、展示も楽しめるように開催した方が良いと感じました。

【高橋議長】

展示開催中には、おそらく展示解説等でお話しされているのかとは思いますが、展示の事後の現在の開催時期でも良いとは思いますが、講座を聞いた後に展示を見る機会がある方がよ

り良いのではと思いました。この千葉学講座には、実際どのぐらいの人が参加されているのか、統計などは取られていますか。

【事務局】

資料『千葉学講座一覧』に載せたものに関して、参加人数を紹介させていただきます。令和5年度の1回目は、会場参加32名・オンライン参加30名の計60名。2回目は、会場参加62名・オンライン参加46名の計108名。令和5年度は合わせて170名。令和4年度は、会場参加41名・オンライン参加47名の計88名。令和3年度は、会場参加48名・オンライン参加60名の計108名。令和2年度はオンライン配信のため統計なし。令和元年は、会場参加のみで93名となります。オンライン参加が可能となったのは、令和3年度からです。参考までにそれ以前は、平成30年度37名、平成29年度60名、平成28年度37名、平成27年度55名、平成25年度40名となっております。令和になってからはオンライン参加も含め参加者数は、それなりに増加していると認識しております。

【細矢委員】

オンラインでそのコンテンツが公開され、消去されなければ、くり返し見てくれる人が段々と増えていくと思うので、5年、10年というわけにはいかなくとも、一定期間、例えば1年間有効として行った場合には、その累計の視聴者数も大事な指標になるかと思います。例えばチラシを後に手に入れた人が、開催をそこで知り、後からオンラインで見ることができるというのは大事で、そこから館の存在や所在を知り、「行ってみたい」と思うことで、広報上も良い材料になるのではないかと思いますので、考えてみてはいかがでしょうか。先ほど企画展と連携してということが盛んに話題となっていましたが、企画展ばかりではなく、常設展をうまく利用するというにも結び付くと思います。こういった場で、すでにある常設展を別の切り口で紹介することで、すでにあるコンテンツを上手に再利用することもできるのではないかと思います。そういった視点からもデジタル媒体をうまく活用するということが大事なのではないかと思います。

【齋藤委員】

千葉学講座にとどまらず、今の細矢先生のお話を伺っていて、私も同じように感じていました。企画展を開催するにしても、各館共通のテーマがあって、例えば「海」などのつながりをもって、博物館・美術館でそれぞれが別の視点から紹介することで、単に他の博物館や美術館を紹介するのではなく、そのテーマに興味をもって来館してくれた人たちにつながりをもって紹介できるので、他館の紹介もしやすく来館にもつながるのではないかと思います。千葉学講座もテーマをもって全体で取り組むというのもとても良いとは思いますが、常設展についても、あるコーナーに興味を持った人につながりをもって他館を紹介することで、ピンポイントで興味を持った人を他館に足を運んでもらうこともできると思います。

そう考えると先ほどご説明のあった連携の取り組み案のなかで、新人さんたちなどが出張して、他館を見たりすることはとても大事だと思います。実際に見ることで他館とつながられる展示などいろいろな部分で自館の参考になることを学べますし、また様々なアイデアが出てきて、「こういった連携もできるのではないか」という意見も出てくると思うので、共通項を探すというか、共通の部分を大事にして、各館がお互いを知っていくことは良いと思います。

【綱島委員】

先ほどの千葉学講座の参加人数が気になりました。最大で150名が現地参加できるという中で、過去の数字はやはりちょっと寂しいというのが実感です。これだけのとても良い内容であるにもかかわらず、人が来ないというのは、おそらくプロモーションの仕方の課題かと思いますが、当然予算など様々な制約があると思うので、お金を掛けずにどう工夫して人に来てもらうかということ、しっかりと考える必要があると思います。私ども NHK にも言えることですが、良いことをやっても、知られないのは残念なことです。現在、時代が変わり、来ていただいた方が情報を発信していく。レストランでの食事などもそうですが、体験は絶対に大事で、行って見て、本物、素晴らしいもの、そして伝統に触れて、それを個人が発信しているということ、我々も博物館側も、大きな組織が意識していかないと、なかなか情報は広がっていかないように思います。そこで SNS という手段の利用となるのですが、ここにはフェイク情報などの問題もあります。事実やリアルの場に触れて、それを個人が発信し、様々な人々がその情報に触れて、ここに来てもらうという仕組みをトータルコーディネートすることが重要で、そうでないと、時代に置いていかれていくと率直に感じました。

【高橋議長】

情報発信につなげていきたい、つなげるようになっていこうということですが、例えばどのような方法をされているのでしょうか。県報などには掲載されているとは思いますが、他に何か積極的なプロモーションみたいなことは行っているのでしょうか。

【事務局】

中央博物館でいうと、当館の SNS アカウントでの広報などは行っています。あとはホームページ等での広報になるかと思います。

【布施委員】

千葉学講座には大変魅力的なテーマも多く、私も参加したいと思いました。また過去のものでも参加できればよかったというものがたくさんありました。ぜひ積極的に PR していただきたいと思いました。質問ですが、色々なテーマがあるので、ひと言で言うのは難しいかも

しませんが、最近の千葉学講座に参加される方の、年齢ですとか、お立場など、特徴的なものがもし見えるような部分があれば教えてください。また「この講座にはこういった方に来ていただきたい」というターゲットのようなものがあるのかお聞きしたい。

【文化振興課】

内容によってかなり幅広い層の方が参加されてますが、基本として県立博物館を訪れるのは高齢の方が多く、テーマ・題名に関しても、小さいお子さんを連れた保護者の方がワクワクするようなタイトルにはなっていないということもあって、博物館の固定層が中心となってしまうきらいはあります。過去には参加者が職員よりも少なかったことなどあり、今テコ入れをお願いしているところです。

【布施委員】

私どもの方でも色々な事業企画をするときに同じ悩みを抱えているところです。様々な内容があるので、全てということではありませんが、テーマによってはターゲットをオープンにして年齢とか関係なく行うもの、逆にターゲットを上手に作る工夫ができる内容を混ぜていたり、場合によってはちょっとドキッとするようなタイトルをつけたりというのも面白いのかなと思いました。私どもの公民館で60周年の記念誌を作成していますが、今までであれば、「あゆみ」ですとか「軌跡」、「未来」などのどこにでもあるタイトルになりますが、今回のタイトルは「変（へん）」です。なぜ「変」かということ結構盛り上がりして、そういうものをあえてタイトルとしてつけてみるようなものがあったら、変化があって面白いと思います。

【高橋議長】

それでは、今後の新たな取り組みについてのご質問・ご意見を伺っていきたいと思います。①～④の案が提示されておりますので、個々に具体的に聞いていただければと思います。

【細矢委員】

具体的な案が示されていて、実行可能であるということで非常に意欲的な計画だと思います。新規事業を行うには先立つものが必要ではありますが、それは期待できる状況だという前提でお話いたします。

1番目の県立博物館の人的交流、情報交換は本当に有効だと思います。私どもの実験植物園と、科博には目黒に自然教育園がありますが、これまで交流がまったくなかったのですが、意見交換会のようなものを実施しました。お互いに意見の違いや取り組みの違いがあり、勉強になりましたし、また、館内・園内での危険事例、いわゆるヒヤリハット経験を意見交換させる機会を設けたところ、新たな気づきもあり、お互いに注意喚起ができたということもありました。こういった異文化交流をすれば、必ず得るものはあるので、非常に有効である

と思いますが、若手職員を中心でとなると情報が限定されてしまうので、せっかくの機会を研修制度のような形で、新人は必ずこれを行い、ただの見学で終わらせずにレポートを必ず提出させる、アイデアを出させることで、今後の経営に役立てていくようにすることが有効ではないかと思います。

3番目の SNS 関係ですが、最近は動画を使えるようなサイトが増えてきています。一方で、動画を編集するソフトも簡単で、しかも安価で手に入るものが増えてきました。若手はそういったものを操作することを学んできており、私自身も今ではできるようになり、広報の人たちと相談しながら、1分動画はかなり効果があるという話でした。そこで、植物園での活動を1分動画にまとめ、現在10本くらい作成しました。素人の編集で多少粗削りな感じにはなっていますが、むしろその粗さが視聴者には刺さるようで、かなりの回数再生されているようです。SNS の場合、良い意味でざわつかせることが大事で、そのために情報量が多い動画を利用する。例えば企画展の開催にあたり、展示がある程度できたときにこれを動画で取っておく。これは常設展・企画展でもできることだと思います。担当者に企画意図を説明するスライド数枚を作成させ、アニメでつなげる。計2分ぐらいにすると、前半で概要をアニメで説明、後半で具体的に見せる。あるいは前半後半を入れ替えて編集することもできる。私自身が数時間でできるような作業になっているので、こうしたものを利用すると効果が上がるのではないかと思います。

最後にデジタルサイネージや共同関連についてですが、共同で企画展のようなものを立てて、1つのテーマを複数の館でもって別の視点で見るというようなこともできるのではないかと思います。先の現代産業科学館の「見る」という企画展に、とても興味をもって、ぜひ行きたいと思っていたのですが、行きそびれてしまいました。例えば「見る」のようなテーマであれば、色々な形で各博物館が取り組むことができます。例えば「千葉で暮らす」、「千葉の衣食住」のような切り取り方はいくらでもできるので、共同のテーマで企画展、連続企画展、シリーズ企画展のようなことも考えられると思います。

【高橋議長】

細矢先生にお伺いしたいのですが、その SNS で発信されているものは、ホームページなどからすぐにたどり着けるのでしょうか。

【細矢委員】

実はそこが難しいところで、SNS ですとコンテンツがバラバラになってしまうのです。そこで結局、ホームページである程度の数が集まったときに、コーナーを作って、過去のもの全てみることできるように改めました。これは博物館での作業をデジタルアーカイブ化することにも結びついていて、博物館法の改正によって、デジタルアーカイブに取り組むべきとされたことにも関わって、有効であると思います。

【綱島委員】

昨年、現代産業科学館にお邪魔して、「見る」展の説明を受けたのですが、その際に「これはもっと多くの人に知らせなければならない」と思った次第です。きっかけは、説明をされている方が実にフラット（ユーザー目線）というか、下に降りてきている感じがして、様々な担当者が「見る」展をひとつひとつ丁寧に、説明していました。これは「顔の見える広報」として、非常に良かったと思います。実際に行って体験をして「これは素晴らしい」と感じれば、もっと多くの人に来るのだと思います。私は見る展で説明を受けて、「これはきちんとNHKとして発信した方がいい、伝える必要がある、素晴らしいのもっと知って欲しい」ということを、放送局（職場）に戻って取材する担当の者にも伝えました。また、見に行くと、感じて、良ければ広めるのはどうか、という話をした覚えがあります。ともすると組織が大きかったりすると上から目線で説明してしまう雰囲気が出てしまったりするのを、いかに低く広報していくかということ、この一つ一つの積み重ねが、おそらくお金をかけるということよりも大事なのではないかと思います。若手の皆さんが柔軟な考え方の元で進めたのだと思いますが、これは若手職員だけの問題ではなく、全体として、もう一度見直して広報していけば、もっと良くなると思います。顔の見える広報で、より多くの人に周知すべきと感じました。

【布施委員】

先ほど細矢先生がおっしゃったように、共通のテーマで実施することは、私も大事なことだと思いました。これまですでに実施されているかもしれませんが、共通テーマをそれぞれの館の持ち味と特徴を生かした異なる切り口で扱うというのは魅力的だと思います。できれば、県民の暮らしや時流に沿ったテーマで、わかりやすいもの、例えば災害・防災ですとか。美術館と防災、具体的にどう結び付けるのか、実際そういった資料があるかどうかという難しさはあるかと思いますが、災害が描かれた作品などもたくさんあるかと思いますが、そういったものを共通テーマとしてやってみるとか。「海」がテーマであれば、関宿城博物館さんは海から遠いですが、逆に1番海から遠い博物館でも実は海と結びつきがあるとか、そういった内容であれば、私も興味をもって行ってみたいと思います。先ほどのターゲットの話にも絡むのですが、何年か前に妖怪を軸に博物館と連携事業を行ったときは、子どもさんからお年寄りまでが楽しく参加することができ、あのような取り組みも素敵だと思いましたので、ヒントにしていいただければと思います。若手人材の育成という点で、あくまで参考ですが、私も立場的に、社会教育関係の職員の研修を担当することが多く、公民館職員の研修を行う際も、社会教育全般の職員の研修を行う際も、必ず公民館、図書館、博物館、全部に触れるようにしています。社会教育機関としてのベーシックを、公民館、図書館、博物館も根底に持っていることはお伝えしたいと思い、そうした取り組みをしています。例えば本日も、この同じ時間帯に、柏の県民プラザが主催で、千葉市の生涯学習センターで公民館職員の研修が開かれています。可能であれば、時間の許す限りにおいて、学芸員さんをあえて異

なる公民館や図書館の研修に参加させて、どのような状況だったかと異文化に触れてみるのもよいのではと思いました。

【高橋議長】

色々と連携の大切さが議論のなかで出ておりますが、例えば「こういう連携をしよう」としたときに、その企画の舵を取るような部署・部門というものは存在するのでしょうか。たとえば館長会議のような。

【現代産業科学館】

顔の見える広報ということで、当館の企画展についていろいろとお話しをいただきましたが、例えば当館の秋の企画展は2、3年先を見据えて、計画的にテーマを選定して行っており、当館独自で行っている状況です。綱島委員から目線が低いとありましたが、学芸課8名のうち学芸員が1名で、当館は小中学校の理科の先生が出向で来ているのが主軸となっています。その先生方が皆で話をして、テーマを決め、その中に学芸員1名が進め方を示して分担しているので、説明もそれぞれ行う形になっております。テーマを定める際にも、防災や錯視など様々な角度から話し合いテーマを決めるようにしています。

【高橋議長】

連携して企画をする場合、こういった連携をするか考える場所が必要になるかと思うのですが、こういった機能をもった部署は、現在どこにあるのでしょうか。

【文化振興課】

学芸課長会議という会議がありますが、現在あまり機能しておりません。また中央博物館に今年度から地域連携課が設置されており、中央博物館だけでなく、他の館も視野に入れた企画を立てていくことを目的に、組織改編をしたところです。

【高橋議長】

人的交流に関して、大学でもそうでしたが、キャンパスが異なると交流がなかなか進まず、学長なども悩むところでした。やはり企画をする部署がきちんと定まっていないと、事が回らないと思いますので、その辺りの工夫が必要かと思えます。

これは個人的な感想ですが、すでにあるコンテンツでも、各館で展示できそうなものがあるのではないかと考えております。例えば、先の美術館の浅井忠の展示で、筑波に旅行したという話の手紙などもありましたが、あれは関宿城博物館にもっていくことができるのではないかと思いますし、中央博物館の酒屋の本店の寺田家の話なども、やはり関宿に持っていけるかなと思います。そういった企画を常に回していくという可能性も考えても良いのではないかと思います。中央博物館の二口善雄植物画展も美術館でやってくれたらと思いました。絵

画が平置きになっているとやはりちょっと見づらくて、額装され縦に展示されている方がやはり近づいて見えてよいかと思いました。例えば、中央博物館でパート1、パート2は美術館に来てくださいというようなやり方も可能ではないでしょうか。

房総のむらで「ぼうじろー」というキャラクターがいますが、千葉県の博物館全体をPRすることなどは無理なのではないでしょうか。ぼうじろーがいろいろな博物館に行き、「体験してきた」とか「見てきた」という発信をして、各博物館でも同じものを載せるようなこともできるのではないかと、そういう使い方も検討されても良いのではないかと思います。

【齋藤委員】

先ほど子供たちをターゲットとするには、とっつきにくいテーマであったり、題名がついていたりというお話がありましたが、今の子どもたちの様子を見てみると、動画などは集中して見ているのですが、ただ展示を見たり、話を聞いたりというのは苦手で、あまり継続しなければ集中もしないという傾向があると感じます。すでに現代産業科学館などで体験型として、子どもたちが実際にそこで体を使って体験してみるものも多いかとは思いますが、博物館の講座などのなかでも、子どもたちが実際に体験ができるものですか、あるいは研究員の専門的な話のなかでも、ただ話をするだけでなく、クイズ形式にするなどして、それを広報する際にも「クイズが何問解けるかな」とか、「なんとか博士に挑戦」というような切り口で、提供の仕方を変える、そこにひとつ加えることで、年齢層の低いところ、子どもたちをターゲットとする場合には有効ではないかと思います。

【高橋議長】

子どもたちの視点に立った広報というのも非常に大切なことではないかと思います。どうしても博物館の来館者は年配の方が多いように思いますが、若い世代に、小学生・中学生それから親御さんに見に来てもらえるような、関係づくりや工夫はしていくべきだと思います。もちろん現在も行っていないわけではないですが、よりアクセスしやすいコンテンツを考えていただくことが重要であると思います。

【文化振興課】

先ほどの「ぼうじろー」もそうですし、小学生のお話もそうですが、以前、中央博物館でチーバくんを使って、ミュージアムトークにチーバくんと子供たちが一緒に行き、そのあと〇×クイズをホールで行うようなことを研究員が工夫して行ったこともありました。過去のいろいろな活動が、コロナ禍などで間が空き、当時の職員も入れ替わってしまっており、継承されていないところもあるので、そういったところを少し思い出し、さらに今に合わせた形でできるように、博物館の方も挑戦していきたいと思います。

【高橋議長】

職員の方の負担が増えるばかりですが、よろしく申し上げます。そのほかご意見等ないようでしたら、このテーマでの協議を終了いたします。それでは、事務局へ進行をお返しいたします。

【書面決議】

以上、内容について書面にて過半数の委員の承認を得ました。